高山の文化を高めた人々 No. 65

森本　栄樹（さかき）のこと

森本　花文

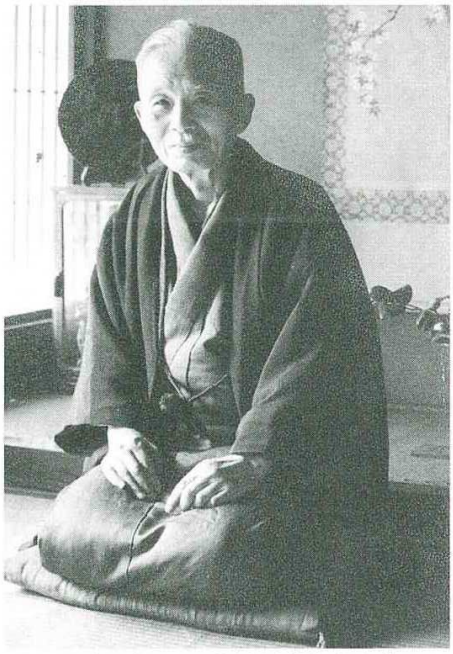
天満神社、茶室にて

父（栄樹）は明治二十年十月二十六日、高山市春日町に生まれ、幼時は、祖父森本古泉に育てられました。

祖父は、茶道宗和流の継承者でもあったので、父が子供の頃は、学校から帰ると気の合う友人と共に、見様見真似で点前の真似をして遊んだそうです。子供なので抹茶の代わりに黄豆粉（きなこ）を使ってやったと言っておりました。

父の職業は神職なのですが、多趣味な人でもありました。神職としての学問は、当時宮村の水無神社桜井宮司に教えを受け、謡曲は伊勢神宮宮司の上原清二氏に、和歌は田中大秀先生の流れをくむ「まゆみぞの会」に出席して短冊を残しております。また、登山も好きで、上原宮司や小林幹先生らと、「御岳の山開き」などにしばしば足を運んでいたようです。

「神道の教義は？」と聞かれても、「良いことか悪いことかは己の胸に聞けば判ること」との考えから、一般の人には細かい教義は必要ないとして、特別なことのない限り口にしませんでした。また、寺院の前を通るときは、頭を下げて行く人でもありました。



昭和23年ごろ、天満神社「杓底庵」にて

父が一人前の神職となったころ、世の中は戦争の真只中に没入し、毎日毎日戦地へ旅立つ人の必勝祈念のお祓いに明け暮れ、「茶道」からは遠くなっていたようです。ようやく終戦となりポツポツと茶道の弟子たちも戻り、少しずつ稽古を始めるようになりました。

また、先代古泉翁の時代は、社中名を「清風社」と言っておりましたが、栄樹の時代には「心身共に清潔、目利物数寄」という茶道の心得から「四常社」と改めました。

道を求めてくる人たちと残された日々を生き続ける中に、宗和流茶道が高山市から「無形文化財」の指定を受けたことを無常の光栄とし、その感激を

九重（ここのえ）の雲に籠りし梅が香のけふ故郷にかほるめでたさ

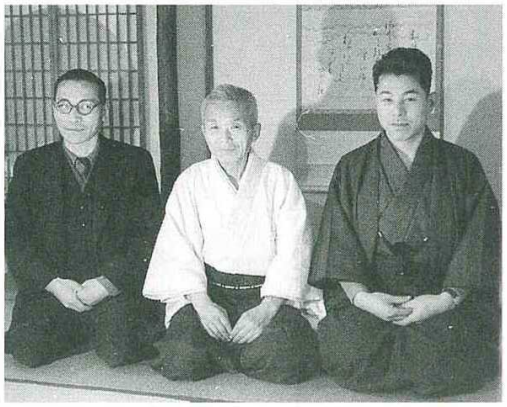
と詠みました。

昭和四十年六月二十日　没

［追記］

宗和流茶道十四世家元。飛騨総社、東照宮、日枝神社、花里天満宮の社司、宮司を務める。

昭和三十六年、高山市文化協会文化功労章。



左から杉原氏、父（栄樹）、野畑氏